

自閉症スペクトラム児の多様性と自主性を尊重した療育プログラムの検討 (27)

—ASD 児ときょうだい児の自己像の違いに着目して—

A review of care and education program that support diversity and individual initiatives of children with autism spectrum disorder: Focusing on the differences in self-image between child with ASD and his sibling

○香月みかん¹ 川村涼夏¹ 服部繭子¹ 西尾綾華¹ 金谷伶菜¹ 藤本和希¹ 肩野礼華¹
荒木穂積¹ 竹内謙彰² 佐野さやか³ 矢藤優子³

○Mikan KATSUKI¹, Suzuka KAWAMURA¹, Mayuko HATTORI¹, Ayaka NISHIO¹, Reina KANATANI¹, Kazuki FUJIMOTO¹, Ayaka KATANO¹, Hozumi ARAKI¹, Yoshiaki TAKEUCHI², Sayaka SANO³, Yuko YATO³

(¹立命館大学大学院人間科学研究科・²立命館大学産業社会学部・³立命館大学総合心理学部)

(¹Ritsumeikan Univ., Graduate School of Human Science., ²Ritsumeikan Univ., College of Social Sciences., ³Ritsumeikan Univ., College of Comprehensive Psychology.)

Key words: , 自己像, 自閉症スペクトラム (ASD) , 療育プログラム

目的

本グループは、2022年10月から発足した大学院生による療育グループであり、小学校低学年までの障害児とそのきょうだい児を対象に療育プログラムを開発・実施している。活動に参加している4兄弟のうち発達段階の近い自閉症スペクトラム (ASD) 児 A (長男) とそのきょうだい児 B (次男) に着目した。行動観察・新版 K 式発達検査 2020 (以下 K 式検査) の結果から兄弟役割の逆転が推察された。そこで、本研究では A と B の相互作用が見られた場面を自己像の視点から検討する。

方法

分析対象児: 長男 A (初回参加時小 2 ; ASD 児)、次男 B (初回参加時年長 ; 定型発達きょうだい児) を対象とした。対象児の生活年齢、K 式検査での発達年齢と発達指数を Table1 に示した。

Table1 対象児の年齢と K 式検査 (2023 年 2 月 1 日実施)

対象児	生活年齢	K式検査	
		発達年齢 (DA)	発達指数 (DQ)
A	8歳8か月	5歳7か月	64
B	6歳9か月	6歳8か月	99

期間: 2022 年 10 月 ~ 2023 年 5 月の活動 (全 7 回、1 回約 120 分)。

分析: 活動における対象児の様子を記録したビデオカメラの映像をもとに、兄弟間の相互作用がよく見られた 2023 年 4 月の 3 場面を抽出し、各対象児の行動とその後の文脈を分析し、対象児の特徴とその背景について検討した。

※本研究は立命館大学人間科学研究所の療育プログラム開発プロジェクトの一環であり、立命館大学の研究倫理の指針に基づいて進められている。研究発表にあたってはプロジェクト参加児の保護者の同意を得ている。

結果

抽出した 3 場面での対象児の行動とその後の文脈を Table2 に示した。3 場面ごとの兄弟の行動とその後の文脈について分析した結果、A は評価される場面を避けるものの、自己主張は弱い傾向、B は自分の気持ちを素直に表現する傾向が見られた。

Table2 3 場面ごとの兄弟の行動とその後の文脈

場面	内容	対象児	対象児の行動	その後の文脈
花さか じいさん (プログラム)	段ボールの木の造花を貼る。時間以内に何個貼れるか競争する。	A	一度興味を示したが『競争』・『Bと二人でやる』という言葉に対し「ヤッパヤメトク」と拒否。	最後に造花を全て貼る場面で手渡された造花を次々と貼り、自分でも箱から取り出して貼る。
		B	プログラムに積極的に2回参加した。	自分が貼った造花の数をスタッフと確認。「(Aと) フタリアワセテヤリタイ」と発言。
あわあわ 絵の具 (プログラム)	絵の具の作成、絵を描く。	A	用意されたプログラムに加え、独自の作品を作成。BやCに方法を教える。	スタッフとBに褒められる。B、Cに作り方を真似られ、Cに完成作品を欲しがられる。
		B	用意されたプログラムに従って遊ぶ。	自分の作品を完成させ、Aの作品を真似る。
Cとの けんか	Aによる独自の作品をCが欲しがらる。	A	「イイヨ、ホントハアカンケド」と発言、Cと自分の作品に背を向ける。	スタッフが作品を庇い、Aは作り方を教えると提案。Cは自分で作成後、依然欲しがらるがAは無視。
		B	Bが制作中の絵をCが踏み、崩れる。	「ゴメンッテイッテ」とCに伝えるが拒否されたため、Cを突き飛ばす。スタッフはBの気持ちを確認。Bは涙を流し「ナオサナユルサレヘン」と泣く。Cも泣く。

※三男C (初回参加時3歳)、A・Bとは発達段階が離れているため、分析から除外。

考察

以上のことから、自己像として A は「自身が求める結果を得ることのできない自分」、B は「自身が求める結果を得られる自分」があることが考えられる。プログラムを通して A は独自の発想で制作に取り組み、周囲から褒められる体験に繋がった。

今後は、A の成功体験・兄弟の交流に繋がるプログラム内容を工夫し、A では消極的な自己像から自分を肯定できる自己像へ、B では万能な自己像から兄弟役割を享受できる自己像への変化を期待したい。